

## 宗教信仰と都市化：三井楽カトリックをめぐって

坂井，信生

<https://doi.org/10.15017/2328557>

---

出版情報：哲學年報. 45, pp. 51-75, 1986-02-28. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# 宗教信仰と都市化

—三井楽カトリックをめぐる—

坂井信生

## はじめに

本稿における基本的な課題は、農村部から都市社会への宗教信仰者の移動が、かれらの宗教生活にいかなる変様をもたらすのであるかという、いわば宗教信仰と都市化をめぐる論考である。すなわち、農村社会で成長した者が都市社会に移動・居住した場合に、かつて農村社会において作動していた相対的に厳格な社会統制、集团的規制からの解放、それまでもっていた永続性のある人格的紐帯からの孤立化のごときアノミー状況、あるいは都市社会特有の非人格主義、都市的価値基準、慣習などへの適応の困難さといった文化的ショックをしばしば体験する。かかる状況におかれた農村部出身者が都市社会において、かつて身につけた宗教生活をどのように継続するのか、あるいは展開していくのであろうか、という問題である。

かかる問題はすでに幾人かの研究者による分析をみることができる。たとえば、ホールト (John Holt) はアメリカ合衆国南部諸州の農村部から産業諸都市への移住者を取扱い、かれらが都市社会において体験した文化的コンフリクトを、セクト的なホーリネス・ペンテコステ系教会に再組織されることにより克服している事実を明らかにした<sup>(1)</sup>。また、ポブレート (Renato Poblete) とオデー (Thomas O'dea) はニューヨークに移住したプエルトリコ人カトリック未熟練労働者が、スター・フロント・セクトにおいて情緒的安定を獲得すべく代替共同体を見出している事実の分析を試みている<sup>(2)</sup>。さらに、われわれも、メキシコにおけるキリスト教的新宗教運動である世の光教会 (Luz del

Mundo) の動向を、農村部から都市社会へ移住した下層労働者の社会的再組織として観察した<sup>(8)</sup>。

上にのべた事例はアメリカおよびメキシコでみられた現象である。果して、これと同じ傾向をわが国においても観察することができるのか、それとも異なっただけを示しているのかを明らかにするために、われわれは具体的な調査地として長崎県五島三井楽町のカトリック村落、そして同地出身者の移動先の都市部として長崎市および次のステップとして大阪府下を選択し<sup>(9)</sup>、農村部におけるカトリック信徒ならびに同地出身の都市居住者の比較調査を試みたのである。かれらが都市社会に移動した場合、(1)カトリック信仰が依然として継続されているか、されているとすれば、農村部カトリックと同一のパターンであるのか、あるいは異なりがあるのか、(2)プロテスタント系教会、とくにアメリカ、メキシコにおける事例のごとくにセクト的宗教集団への加入傾向がみられるか、(3)それとも、たとえば創価学会のごときキリスト教以外の都市的宗教への加入がみられるか、といった問題点が提起された。都市部への移動者としてわれわれは長崎市および大阪府下におけるかれらの調査を予定したのであるが、59年度の調査では長崎市のみしか取扱えなかった。そのため、本稿は長崎市居住者のみを対象とした中間報告的性格をもつものとならざるをえないのである。はじめにご了承願っておきたい。

長崎市の調査を終えただけの現時点ではあるが、結論的にいえば、(2)および(3)についての事例はまったく観察されていない。つまり、この三井楽出身者でプロテスタント系教会あるいは他の宗教集団に加入した者は1例もなく、すべて何らかのかたちでカトリック信仰を継続している。したがって、本稿は(1)の問題を中心に、農村部の三井楽に留まっているカトリック信徒と長崎に移住したそれとの、宗教生活におけるいくつかの断面を比較し、都市移住の宗教生活にあたえるインパクトについて若干の考察を試みたいと考える。

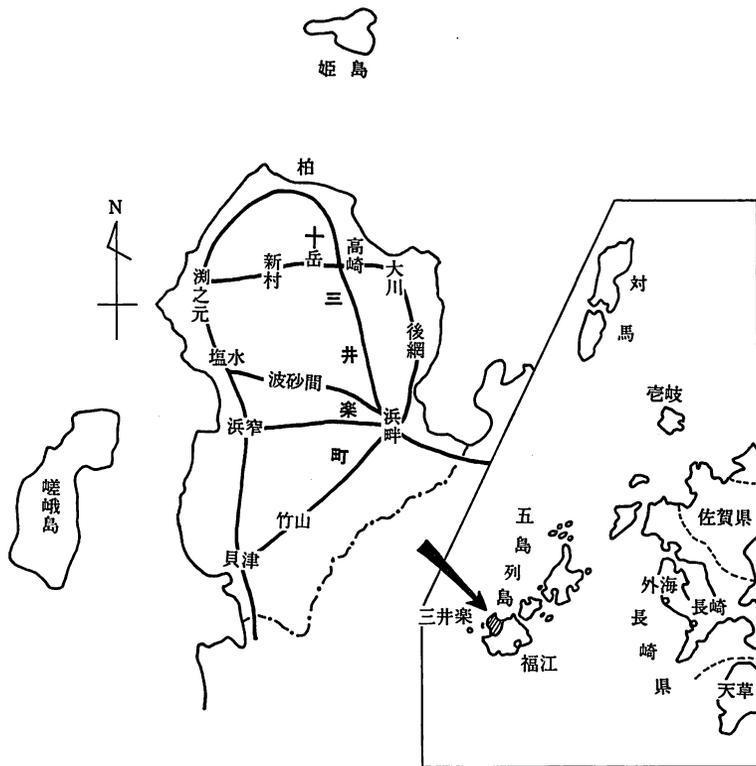
## I

三井楽町<sup>(9)</sup>は五島列島(長崎県南松浦郡)南端の福江島の北部に位置し、福

江市よりバスでおよそ30分で役場、町立中学校、病院などのある三井楽（浜畔）に至る。三井楽町には10を越す部落が点在するが、岳、測之元、大川、塩水および竹山は全戸がカトリック、高崎、後網、浜畔、貝津は非カトリックとの混在部落、その他は非カトリック部落である。昭和59年3月現在で人口5,452名、戸数1,760であり、半農半漁の町である。水田148ha、畑543haであるにすぎないが、とくに、水田は三井楽の先住農民、地下の所有であり、近世後期以降に移住してきた居付のカトリックによる所有はない。他に樹園地が若干あるが、養蚕のための桑樹が大部分である。農家戸数は501戸（うち専業農家140戸、兼業農家361戸）のうち、経営規模1ha未満が230戸を数えている。主要農産物は水稲、麦類、甘藷であり、近年養蚕および肉用牛肥育が導入されている。農業におけると同じく、漁業においても零細規模が主体であり、ほとんどは5t未満ないし無動力船による沿岸漁業であるにすぎない。三井楽漁港（浜畔）、柏漁港そして建設中の高崎漁港と最近漁業の大型化、組織化への動きがみられるとはいえ、離島における小資本では20t未満の漁船への集約化を実現しうる程度であるという。

上に概観したような三井楽であってみれば、とりわけ若年層は県の内外に就労先を求めて転出せざるをえないのは当然のなりゆきである。事実、この20年間の人口流出はいちじるしい。まさに、典型的な過疎地域といっても過言ではない。昭和40年の人口は9,202名であるのに対して、59年には5,452名、減少率は41%にも達している。ここで注目しなければならないことは、三井楽町のなかでもカトリック信徒の減少率の高いことである。たとえば、三井楽町の町部でほとんどが非カトリックの浜畔は40年に4,024名であったのが59年には2,828名と29.72%、非カトリック部落で最北端の柏ですら33.33%の減少率であるのに比べて、カトリック部落の岳78.87%、測之元75.00%、大川66.67%、塩水63.12%にもものぼる高い減少率を示しているのである。さらに、カトリック部落を主たる校区とする岳小学校は、ピーク時に300名をこす児童数であったにもかかわらず、59年度には82名に激減し、今日、廃校の動きすら出はじめているほどである。

### 三井楽町略図



	町人口	信徒数	比率(%)	受洗者数
明治2 (1869)	2,664	24	0.90	
4 (1871)		152		
13 (1880)		316		
昭和15 (1940)	6,688	2,417	36.14	
25 (1950)	9,889	2,721	27.52	
40 (1955)	9,202	1,416	15.39	49
45 (1970)	7,803	1,278	16.38	26
50 (1975)	6,328	1,071	16.92	13
55 (1980)	6,045	647	10.70	4
58 (1983)	5,609	582	10.37	3
59 (1984)	5,452	602	11.04	8

表1 三井楽カトリックの減少状況

表1は三井楽町人口に対するカトリック信徒の比率を示している。昭和15年(1940)年には人口6,688名に対し、カトリック信徒2,417名と36.14%であったが、高度成長期の昭和40年代に入ると急激に減少しはじめ、45(1970)年には16%となり、最近では10%前後の状況である。また、三井楽における受洗者数(この場合幼児洗礼である)は、40年代前半までは数10名を数えているが、後半から50年代に入ると10名台となり、ここ数年は1桁である。このことは信徒の間における出産可能家族が大幅に減少している事実を雄弁に物語るといふべきであろう。

われわれはここで、三井楽信徒の相対的に多い都市移動の原因について論究することを目的としているわけではない。かれらの多くが都市部に転出している事実、そして、この都市社会への移動がかれらの宗教生活にいかなる変様をもたらしているかを明らかにしようとしている。したがって、その原因に関しての詳細は避けたいのであるが、たしかに経済的貧困および就労先を求めての移動であることは否定できない。この点は他の過疎地域で見られる現象と、子供数の多さを除けば、大きな異なりが存するわけではないといえよう。しかしながら、あえてつけ加えるならば、かれらは後述するように、かって大

村領から三井楽に移住してきたいわゆる居付の人々の子孫である。したがって、かれらは三井楽の土地そのものに対して地下の人々ほど強い執着をもっていないし、移住することにさほどの困難と抵抗を感じていないということである。事実、若者による単身の離村もさることながら、一家挙げての移動もかなりみられるのである。

ここで、五島そして三井楽におけるカトリックの歴史を粗描しておきたい。

そもそも五島におけるカトリック信仰の導入は、永禄5（1562）年時の領主宇久純定の病臥に際して、当時大村領横手浦に滞在していたトーレス神父に医師派遣方を依頼したことに端を発している。神父はディエゴという日本人キリシタン医を遣り、重態であった純定はかれの手当により数日にして全快したという。純定はディエゴからキリシタンの教えをきき、かれに托して宣教師の来島を懇請した<sup>(6)</sup>。この要請に応じてトーレス神父はアルメイダとロレンソを派遣する。『日本西教史』には次のごとくに記されている<sup>(7)</sup>。

五島の国主は温和にして君主たるの品行あるを以て、部下の人民は大いに之を恭敬せり。曾て国主は聖教の日本に行はるるを聞き、其教法の如何を知らんことを欲せり。故に平戸に在るバルタザル・ガゴ師（バルテザル・ダ・コスタ）に請ふに、基督教師一人を五島に送らんことを以てせり。（略）故に師父は大村及び有馬の信者監督の爲め常にコシノスに在留せる日本基督教会のトレー師長（トーレス）に書を贈り此事を告ぐるに、トレー師長は此機を失はず如此静謐なる国に聖教を布かんと欲せり。然れども此事を以て任ずべき師父あらざるを以て法兄弟アルメーダ（修士ルイス・デ・アルメイダ）及び日本人たる法兄弟ローラン（ロレンソ）の二名を五島に送れり。（略）遂に千五百六十六（永禄9）年の始に当て五島に到る、国主懇親を以て之を接待す。国主は宮殿中に一大室を整備し、此に高く主座を設け、又其兄弟二人の爲に二座を別にす。夫人は宮女と共に薄絹の簾を以て隔てたる座に在り、然れども外より之を見るを妨げず、其他列席の諸君子凡四百余人な

り。

このように、純定の好遇をえたアルメイダおよびロレンソは積極的な布教活動に努め、やがて家臣の中から受洗者をえ、場所は明確ではないが、会堂の建立にまでいたっている<sup>(8)</sup>。さらに、純定の庶子左衛門大夫純堯はアルメイダの後任ジュアン・バプチスタ・モンチ神父より永禄11年に洗礼をうけ、ルイスの霊名を授けられている。父純定はこれを知っても不満の意を表すどころか、むしろキリシタン庇護の意志を明らかにしたという。元亀2（1571）年純定の退隱のあとをうけてルイスが襲封、五島のキリシタンはさらに盛況を呈するにいたるが、天正7（1579）年ルイスは35歳の若さで世を去るのである。

嗣子ルイス純玄は幼なくして父の後を嗣いだが、その成人まで叔父の玄雅が五島を治めた。玄雅はキリシタン宗門に公然と敵対し、これを根底から滅することを決意、宣教師を追放し、教会堂や十字架を破壊し、キリシタンには強制的に仏教儀式に参加させた。中には棄教した武士も多かったが、その多くは漁夫農民であった<sup>(9)</sup>。

秀吉が宣教師追放令を発した天正15（1587）年、『五島編年史』が「会堂、住院、各地ニアルモノヲ、其地官憲ニ引渡シ、数人ヲ商船ニ便乗シテ退カシム。教徒ノ大多数ハ有馬領内ニ潜入シ、尚大村領、天草領大矢野島、平戸領生月島、度島及五島ニ隠レタリ」と『松浦文書』を引用しているように<sup>(10)</sup>、次第に五島キリシタンにも暗雲が接近してくる。慶長2（1597）年2月、いわゆる26聖人が長崎立山にて磔刑に処されるが、その1人に五島出身のジャン・ソーアンがふくまれている。とはいえ、『日本切支丹宗門史』に慶長6年五島の島々に「キリシタンはその数二千人、みな百姓か漁夫で、此世の富こそ無けれ、靈的の富はあり餘る程持ってゐた。ここに百五十人の受洗者があつた」あるいは11年の記事に「一人の神父が毎年同地に出かけてゐた。この年千八百人の罪の告白があり、又小児百人成人六十人の洗礼があつた」と報じられている<sup>(11)</sup>とところからすれば、離島の故か信徒たちはよく信仰を保持していたことがうかがわれるのである。

慶長17（1612）年徳川幕府はキリシタンを厳禁し、同19年には高山右近らキリシタン148名をマニラ、マカオに追放している。こうした動きと関連して五島においても「切支丹禁教令ニヨリ藩主盛利領内ノ同教徒ヲ追放」に処した<sup>(12)</sup>。そして寛永5（1626）年には家老貞方勝右衛門、松尾九郎右衛門相議して領内に下記の制札を建て、キリシタンの探索を嚴重にするとともに、その入島を防いでいる<sup>(13)</sup>。

### 定

- 一、何国の廻船にても此浦に着船の時船中の人数宗体を堅可改事
  - 一、何国の廻船にても船頭より船中にキリシタン無之通の書物を可請取事
  - 一、万事知れざるものに一夜にても宿借す間敷事
- 付、地下、旅人によらずキリシタン有之由於申者褒美を取らすべきものなり
- 右条々於相背輩可被処罪科者や仍下知如件

かくて、布教以来約半世紀余にわたった五島キリシタンは、相続く迫害のために殉教と四散を重ね、ほとんど歴史の舞台からその姿を消し去るのである<sup>(14)</sup>。『五島編年史』によれば、長崎奉行より「隣国邪宗門有之間、五島も入会改候様」達しがあり、「由テ、盛次、在々浦々ノ者ヲ所替へ申付ケタルヲ以テ、偽り申スコトナラズ、邪宗門根絶（？）ス。コノ仕置隣国へモ聞エタルコトナリ」という<sup>(15)</sup>。同書の編者が「邪宗門根絶（？）」と疑問符を記しているように、それが真に根絶であるのかどうか、うかがい知るよすがは全く残されていない。寛文7（1667）年以降、毎年絵踏みが行なわれており、長崎奉行より踏絵2枚を借出し、1枚を上五島、1枚を下五島の各地に巡検して用い、キリシタンの探索絶滅につとめている<sup>(16)</sup>。

さて、時を経ての寛政9（1797）年、五島侯盛運は領地の開発を策し、大村領民の五島移住を大村領主純尹に申入れた。寛政4年幕府が「荒地開墾方規」を出したことによっている。『公譜別録捨遺』によれば、「寛政九年藩主盛運、

大村の農民百八人を五島に移し、田地を開墾せしむ。五島は地広く人少くして、山林の未だ開けざるもの多きを盛運公常に憂い給ひ、此度大村侯に乞うてその民を此地に移し給ふ。これより後、大村の民この由緒を以て五島へ来り住むものその数を知らず<sup>(17)</sup>とある。『五島編年史』の編者が「然モノノ多クハ所謂潜伏切支丹ノ徒ニシテ茲ニ五島ニ於ケル天主教徒ノ発展ノ第一歩ヲ印スルニ至リシナリ」と註記しているが<sup>(18)</sup>、大村領からの移住者のほとんどは外海地方のキリシタンであったと伝えられている<sup>(19)</sup>。

しかしながら、これ以前にもすでに大村領民の五島移住をみることができ、三井楽関係のみでも次の3項の記録を見出しうるのである。

柏村、測之元へ大村御領百姓共、明和九年（改元シテ安永元年—1772年）辰年、居付相成り、大勢妻子召連相成候に付き、時の御代官真弓弥五兵衛方より御蔵元へ相達、於御役所御評議之上御免被成、則大村より外証文請取り罷成、右両村百姓仲間に入れ致渡世候故、此節人附帳面にも相記し候につき相改候処、家数十六、人数男女にて七十人罷在候。（『青方文書』）<sup>(20)</sup>

安永二（1773）年正月廿六日、三井楽へ大村領ヨリ大勢居着ノ者来ル。地下人同様申付クベキ旨、宗門奉行本村市郎左衛門ヲ以テ申聞ク。（『増補継志系図』）<sup>(21)</sup>

安永五年七月廿七日大村領ノ百姓、家主十四人（内漁夫一人）、捨往来ヲ持参シ居着ヲ願出シカバ之ヲ三井楽村測ノ元ニ置ク。（『増補継志系図』）<sup>(22)</sup>

その後も大村領外海地方からのキリシタ移住者は続いたと思われる。たとえば、明治2、30年代に三井楽教会を司牧していたペルー（Pélu）神父およびクレンペテル（Kleinpeter）神父によって作成された「五代譜」（婚姻用の家系図）には、大野、三重、神浦、赤首のごとき外海地方の出身地名がみられる<sup>(23)</sup>。また、古老によれば今日でも在来の居住者（地下）と大村領からの居付の子孫

であるカトリック信徒の間に、若干の方言の異なりがあるといわれている。

明治に入ってのちも新政府がキリシタン弾圧を継続したことはよく知られている。長崎浦上キリシタンのカトリック教会復帰の報に接した三井楽でも、キリシタン信仰を公然と表明するに及び、『異宗徒人員帳三井楽掛』によれば<sup>(24)</sup>、明治元年11月露顕した者として「三井楽之内岳村居付家五軒人数二十七人」とある。さらに明治2年2月露顕したとして、汐水居付家6軒人数20人、大川居付家5軒人数21人、測之元居付家17軒人数72人が記されている。そしてこの年、明治元年の露顕組25名と2年の露顕組11名が岳郷の山下善三郎方の屋敷牢に投獄され、苛酷な迫害と拷問に耐えたことが伝えられている。この座敷牢跡には三井楽信徒迫害百周年記念として、昭和44年に「信仰の碑」が建立されている。

出獄後かれらのある者たちは長崎に行き、洗礼を受けている。明治5(1872)年以降外人神父が密かに司牧活動を試みたことがあるとはいえ、三井楽を初めて公式に訪れた神父はフレノー神父であり、明治11(1778)年のことである。三井楽では巡回神父が大祝日、黙想会、主日などに時折訪れるのみであったので、世話役、教え方として平岡善助(岳)、竹本福松(新村)、村中栄治(測之元)、浜本種五郎(高崎)の4氏が任じられ、ミサはかれらの家で捧げられた。熱心な信徒は堅信、初聖体、ことに黙想のために長崎まで出向くことがあったとも伝えられている<sup>(25)</sup>。

やがて、教会堂建設の議が提案され、岳の出口次郎所有の地に明治11年起工、13年12月24日に落成、祝別式が盛大に挙行された。教会の記録によると、明治4年に152名、教会堂が完成した13年には316名の信徒数である。

フレノー、マルマン、ペルー神父による巡回司牧のあとをうけて、明治22(1889)年片岡桐栄神父が三井楽の定住主任司祭として着任、各部落ごとに世話役の宿老あるいは教え方を選出、信徒の指導育成、信仰生活の充実に努めている。教え方の多くは堂崎の伝道学校で教育を受けている。現司祭山内実神父はフレノー神父以来17代、片岡神父以来14代目になる。現在の教会堂は昭和46(1971)年に新築完成、600名の三井楽カトリック信徒の信仰生活の中心と

なっている。さらに、昭和5（1930）年には「小さき花の修道女院」と名づけられた三井楽修道院が発足<sup>(26)</sup>、各部落の教え方と教会奉仕に努めている。日曜日のミサ終了後、シスターが各部落に出向いてカトリック教理を指導している光景は今日でも続けられている。なお、三井楽教会からは20名をこす神父、70名余の修道女そして30名近くの聖職志願者を出している。

このように、今日の三井楽カトリック信徒は18世紀後半以降大村領外海地方から移住して来たキリシタンの、そして明治初年の迫害にも屈することなくカトリック教会に復帰した信徒の子孫である。岳、新村、淵之元、塩水、大川の各部落は全戸、高崎は半数がカトリックであり、後網、浜畔は明治以降上記部落や姫島、堂崎方面からの移住信徒が「外教者」（非カトリック）の間に居住している。

## II

三井楽町およびこの地のカトリックに関する概観的理解をえたところで、われわれは本稿の主たる課題についての論考に進みたい。

本稿の主要な課題は、宗教信仰者が農村部から都市社会に移動した際に、かれらの宗教生活にいかなる変化が生じるのであるか、ということであり、この間に対して三井楽カトリック信徒を通してアプローチしようとするのである。具体的な操作として、われわれは三井楽信徒と三井楽から都市部に移住している信徒を、とくにスターク（Rodney Stark）とグロック（Charles Y. Glock）が提唱した宗教性（religiosity）の5つの断面<sup>(27)</sup>での測定において試みようと思う。

スタークとグロックは、細部においてはかなりの相違があるとはいえ、世界の宗教にはその宗教性が表出さるべきより一般的な領域として考えられる一致点が存しているとして、かかる一般的領域の核となる5つの断面（dimension）を識別する。すなわち、体験的（experiential）、儀礼的（ritualistic）、イデオロギー的（ideological）、知的（intellectual）、帰結的（consequential）とかれらが名づけた断面がそれである。

第1の体験的断面は、すべての宗教において宗教的人物が究極的実在に関する直接的知識に到達し、あるいは宗教的情緒を体験するとの事実にもとづいている。この主観的宗教体験には畏怖から高揚、謙讓から喜悅、魂の平安から神的存在との合一のごときがふくまれる。儀礼的断面は宗教信仰者に期待されている特定の宗教的実践であり、礼拝（ミサ）出席、祈禱、 sacramentへの参与、断食、等々といった諸活動からなっている。イデオロギー的断面は宗教的人物がある特定の信仰を有するとの事実から構成されている。信仰の具体的内容や範囲は各宗教間に相違があるのみならず、同一の宗教的伝統の枠内においても異同をみることがあるとはいえ、あらゆる宗教はその信仰者に信すべきことを期待している一連のイデオロギー、宗教的信念を有している。知的断面は宗教的人物がその宗教のもつ基本的教義や聖典について精通し、知識を有しているとの期待と関連している。知的断面とイデオロギー的断面とは密接な関係を有している。信仰上の知識はその受容にとって必要条件だからである。しかしながら、信仰は知識にしたがうものでもなければ、すべての宗教的知識が信仰に負うものでもない。

帰結的断面は以上4つの断面とは若干ニュアンスを異にしており、宗教信仰、実践、知識そして体験の個人の日常生活ないし世俗的行為に対する感化、影響をふくんでいる。つまり、かかる宗教への関与の結果として「人が何をなすべきか」。神学的用語で表現すれば「業」(work)の概念と関っている。帰結的断面は人と神との関係というより人と人との関係ともいうことができよう。

われわれは上のべたスタークとグロックによる宗教性の5つの断面に関して質問表を作成し、三井楽信徒と三井楽からの都市移動者との比較を試みたのである。本稿では資料上の制約もあって、イデオロギー的、儀礼的そして知的断面を中心にのべ、帰結的断面については若干ふれることにし、体験的断面のみは資料の不足ゆえに省略せざるをえない。あらかじめお断りをおきたい。

次にわれわれの調査対象となった被験者について言及しておく（表2参照）。

三井楽居住のカトリック信徒のうちわれわれの被験者となったのは、男性39

	数	年 齢 層 (歳)	平均年齢 (歳)	義務教育終了者 (%)	高等学校卒業 者 (%)	大学卒業 者 (%)
三井楽						
男	39	28—78	59.25	36(92.40)	3( 7.69)	0
女	66	23—82	51.54	60(90.90)	6( 9.09)	0
計	105	23—82	54.41	96(91.43)	9( 8.50)	0
長 崎						
男	16	27—69	46.19	11(68.75)	3(18.75)	2(12.50)
女	15	26—78	48.27	10(66.67)	5(33.33)	0
計	31	26—78	47.19	21(67.74)	8(25.81)	2( 6.45)

表 2 三井楽および長崎被験者の年齢・学歴の比較

名、女性 66名の計 105名の既婚者である。平均年齢は男女それぞれ 59.25歳、51.54 歳と過疎地域特有の高さであり、若年層がいたって少ない。職業構成をみると、大部分が兼業をふくむ農漁業であり、前にものべたごとくに至って零細である。学歴は男女ともに義務教育終了者が90%以上を占め、残りはすべて高等学校（専門学校をふくむ）卒であり、大学卒は皆無である。また、かれらのおよそ半数は 2，3 年から30年の他住経験の持主である。

三井楽で成長し長崎に移動した信徒のうち、男性16名、女性15名が長崎でのわれわれの被験者である。男性は27歳から69歳までで平均46.19歳、女性は26歳から78歳までで平均48.27歳、全体平均47.19歳と三井楽被験者より7.22歳若くなっている。女性15名のうち2名が独身である他は男女ともに既婚者である。男性の職業は多岐にわたり、会社員 8（うち 4 名は船員）名、小売商 2 名、建築業 2 名、会社経営 1 名、高校教師 1 名等となっている。学歴も三井楽に比して幾分か高く、義務教育終了者は男女ともに60%台であるのに対して、高等学校卒 5 名に大学卒男性 2 名である。こうした諸点でもすでにかれらの都市化傾向が理解できよう。

この被験者群に関して興味ある事実は、かれらの大部分が長崎市の北部、つまり浦上、本原、三原といった長崎市でもカトリック信徒が相対的に多く居住しているいわばカトリック・ゾーンに住居を定めていることである。この事実

がかれらの宗教生活といかなる関連をもつのか、多分に関心をそそられる事実でもある。

上にのべた三井楽信徒および三井楽出身の長崎市在住信徒にみられる、宗教性の4つの断面のそれぞれに関するわれわれの調査結果に言及する。調査はインタビュー方式によっている。

### 1. イデオロギー的断面

カトリック信徒は教会の定めた教理に対する信仰的確信をもつことが期待されているし、事実、信徒はそれらを確かに信じている。この断面を測定するために、『公教要理』（『カトリック要理』）にもとづいて、天地創造、唯一神の存在、イエスの神性、奇蹟、復活、聖母マリアの被昇天、審判のごときカトリック教会の中核的教理に対する信仰が問われた。回答カテゴリーは信じている場合に「はい」、信じていない場合に「いいえ」、どちらか決められない場合には「わからない」の3項である。得点は20点を満点とした。

三井楽ではこの断面においていちじるしく高い信仰度をみることができる（表3）。男性 19.34、女性 18.66と高得点だからである。20歳代から70代までのすべての年齢層を通して18～19の得点であり、とくに年齢別の異なりは観察されない。かれらの回答には「いいえ」という否定はほとんど見出されず、「はい」および若干の「わからない」である。設問のうち、来世に対する信仰とイエスの再臨・公審判について、とりわけ女性に「わからない」が多い。し

	信じている	信じていない	わからない	得点合計
三井楽				
男	19.34	0.14	0.52	20.00
女	18.66	0.36	0.98	20.00
長崎				
男	15.58	2.58	1.74	20.00
女	16.94	0.52	2.54	20.00

表3 イデオロギー的断面における得点

かしながら、全体的にみれば、カトリック教会の中核的教理のほとんどは、若干の疑念をもつ者をふくむとはいえ、いたって強固に受容・信仰されているといっても過言ではない。

これに対して長崎居住者の場合、男15.58、女性16.94と三井楽被験者に比して幾分か低い得点である。とりわけ男性が低く、その差は3.76である。年齢別にみれば、2,30代が低く高年齢になるにしたがって得点も高くなる傾向がみられる。50代以上をとれば三井楽の得点値とほぼ等しい。とくに若年層（39歳以下）の男性は13.20とかなり低くなる。三井楽ではほとんど年齢差を見出しえなかったことからすれば、都市移住はこの断面つまり信仰度をある程度低下させる傾向をもっているといえそうである。

さらに、長崎における回答には「いいえ」と同時に「わからない」が増加しており、この断面に関して幾分かの動揺を観察することができる。三井楽の場合と同様に、設問のなかでも来世、再臨、公審判などについての疑問ないし否定は多い。日本のカトリック信徒にこれらの教理に関する信仰が稀薄である、との性急な一般化はさけたいが、終末信仰の強いメキシコ・カトリック信徒と比較して興味を覚えるところである。

## 2. 知的断面

カトリック信徒は教理を信ずるのみでなく、教理あるいは聖書についての知識を有していることが期待されている。そこで、われわれはいくつかの基本的な宗教的知識についての測定を行った。設問のほとんどすべては前項と同じく『公教要理』にもとづいている。たとえば、旧約聖書の人物3名の記入のごときである。得点も同じく20点満点である。（表4）

この断面に関する得点は三井楽、長崎ともにいたって低い。両者の男女ともに20点満点で10点以下である。一般に農村居住信徒の宗教的知識の度合いが低いことはよく指摘されるところであるが<sup>(28)</sup>、この場合も例外ではなさうである。年齢的にみると三井楽、長崎ともに若年層において低く、高年齢になるにつれて上昇してくる。ただし、長崎の女性グループの場合、3,40代が幾分か

	得点	正 解 率 (%)			
		旧約聖書人物名(3名)	福音書名(4)	弟子名(3)	ローマ教皇名
三井楽					
男	9.10	9.75	20.51	25.64	41.03
女	8.24	3.03	31.82	27.27	27.27
長崎					
男	9.13	25.00	43.75	31.25	56.25
女	6.87	6.67	13.33	20.00	40.00

表4 知的断面における得点および正解率

高く、高年齢は低くなっているが、大きな差があるわけではない。

イエスの弟子名を3名記入という設問に対する正解率は表3のごとくにきわめて低く、4名に1名の割合で正解しているにすぎない。福音書の名称についても同様であり、無記入つまり福音書の名称を一つだに知らない者が、三井楽男性61.54%、女性57.58%、長崎男性50.00%、女性73.33%と半数以上を占めている。このように新約聖書のみならず旧約聖書についての知識度もいたって低いのであるが、長崎の男性グループが他の3グループに比してやや高い得点であるのは注目に値する。

さらに、予想と大きく異なっていたのは、現在のローマ教皇名を問うた設問に対してである。カトリック信徒であれば、そして数年前に長崎を訪問されたこともあり、ほとんどの信徒はその名を知っていると思われた。事実、かれらの家庭祭壇（香台と呼ばれる）の上にはヨハネ・パウロ二世の写真が掲げている。それにもかかわらず、正解率は三井楽、長崎ともに男性が幾分高いとはいえ、50%台かそれ以下であり、その半数近くが答えたにすぎないのである。

このように、知的断面に関して三井楽、長崎ともにいちじるしく低い。聖書を繙くこともいたって稀であるし、もちろん、読書の習慣もほとんどない<sup>(29)</sup>。三井楽ではとくに教え方が若干の宗教書を読む程度である。信徒に配布される「長崎カトリック教報」はかなりの数によって読まれているが、その他の定期刊行物に接する度合いは低い。

興味深い点はイデオロギ-的断面それに次項でのべる儀礼的断面においても、三井楽、長崎の男女4グループのなかで最底得点である長崎男性グループが、この知的断面においてのみむしろ9.13と他を凌いで第1位となっていることである。すなわち、信仰度、実践度ともに最底であるにもかかわらず、宗教的知識に関しては最高得点を示しているのである。このことは、おそらく長崎居住者の高校、大学卒の比が高くなっていることと無関係ではないと思われる。都市化と宗教的知識の増大傾向との間にはプラスの相関があるといえそうである。

### 3. 儀礼的断面

カトリック信徒に期待されている特定の宗教的実践面に関する測定であり、設問はミサ聖祭への出席および告解の頻度、朝晩の祈りなどがふくまれている。同様に20点満点とされた。得点は表5のごとくであり、イデオロギ-的断面と同じく三井楽の男女グループが16.79、16.82と高く、ついで長崎女性16.00、そして長崎男性グループは10.81とかなり低くなっている。

ミサへの出席および告解に関して、三井楽信徒はいちじるしく高い頻度を示している。ミサについての回答カテゴリー①ほとんど毎日曜日、②月に1、2回、③年に数回、④年に1回位、⑤まったくあづからない、に対して男女ともに90%以上が①の回答である。「病弱のために時々しか出席できない」と註記した老女を除く残りすべては②である。①の回答者のなかには毎朝の平日ミサ

	得 点	ミサ出席(毎日曜) 率 (%)	告解(5回以上) 率 (%)	黙想会出席率 (%)
三井楽				
男	16.79	92.30	53.85	89.74
女	16.82	90.90	56.06	90.91
長 崎				
男	10.81	62.50	18.75	75.00
女	16.00	86.67	33.33	100.00

表5 儀礼的断面における得点

にもかなりの出席者がある。長崎の場合も三井楽ほどではないにしても相対的に高いといえる。男性62.50%、女性86.67%が①を示しているからである。しかし、男性には②以下もかなりみられ、2名の⑥がふくまれている。平日ミサへの出席者はほとんどいない。とくに男性被験者には船員、小売商がふくまれており、かかる職種が定期的なミサ出席を妨げていることは否めない。

次に告解をみてみよう。「今年に入ってからの告解」の回数を問うた。回答は①0回、②1回、③2～4回、④5回以上（回数記入）である。『公教要理』には年1回は告解をするようにとの勧めが記されており<sup>(80)</sup>、日本のカトリック信徒の平均も年1回であるという<sup>(81)</sup>。これに対して、三井楽では調査が8月であるにもかかわらず、男性③35.89%、④53.85%とすでにその90%が最底の規定を大きくこえている。④の21名のうち17名が回数を記入しているが、最高は25回、平均は8.59回と月に1回の頻度である。女性も同様であり、③37.88%、④56.06%と94%が規定を上廻っている。女性の最高は10回で記入者30名の平均回数は6.90とほぼ毎月の告解頻度を示している。他方、長崎の調査は10月であるが、男性①②および③④の合計がそれぞれ50%とかなり下降する。女性は③④合計で93%、④の回答者中最高は10回、平均8.8回とむしろ三井楽より高い頻度を示している。男女ともに高齢者の頻度が高い。

黙想会への出席は三井楽、長崎ともに相当高い。三井楽ではその90%が「今年の黙想会に出席」と回答している。欠席者による理由も公務出張、病気、出産等々と明白である。長崎の場合、男性が4分の3、女性は全員が出席である。1男性被験者は「普段仕事でミサにあづかれないので、努めて黙想会には出ている」という。欠席男性の理由はすべて「仕事」である。

ともかく、儀礼的断面に関しては長崎男性グループが若干低いものの、その他のグループはかなり高く、カトリック教会の儀礼的側面を重視するすがたをうかがわせる。

#### 4. 帰結的断面

上述の3断面の効用としての日常的行為面に関係する帰結的断面について、

われわれはいくつかの設問を試みたが、ここでは配偶者選択、子供数、および子供の養育を取上げたい。

配偶者選択に関して、三井楽男性 39 名のうち三井楽出身の妻が28名（71.79%）と圧倒的に多く、次いで福江、岐宿などの五島出身である。すべてカトリック信徒であり、夫と同じく幼児洗礼一堅信とほとんど同一のカトリック的伝統と環境の中で成長している。長崎の男性の場合16名中妻が三井楽出身4名、三井楽外が12名、幼児洗礼一堅信者10名、成人洗礼2名、外教者（非カトリック）2名である。因みにこの外教者を妻としている2名は、かつて座敷牢に投獄された信徒の玄孫にあたる。女性13名の夫はすべて三井楽出身で、幼児洗礼一堅信者である。

このように、外教者を配偶者としている2名を除くと、すべて信徒との宗内婚であり、その大部分は三井楽ないしはそれとほとんど類似した宗教的環境で成長した者たちである。それにもかかわらず、他の3断面に関してかなりの異なりが生じているという事実から、都市化という変数を考慮せざるをえないのである。

子供数もカトリック信徒の場合この断面の指標となりうる。教会の立場はいわゆる産児制限を禁止しているからである。三井楽では男性平均5.82名の子供数、40歳以上では6.03名、50歳以上になると6.48名である。女性も平均5.39名40歳以上5.87名、50歳以上7.96名であり、男性と同じく年齢が高くなるにつれて子供数も増加する。これに対して長崎の男性の子供数平均3.06名、40歳以上3.80名、50歳以上でも3.75名と大差はなく、女性も平均3.07名、40歳以上3.40、50歳以上で4.17と若干の増加をみるにすぎない。他方、39歳以下は今後の出産の可能性があるとはいえ、三井楽男女で2.00、3.00、長崎は1.83、1.50といちじるしく減少している。『日本のカトリック』の著者が、信徒たちは自然の形での家族計画が必要と認めており、30代から40代のほとんどが避妊を容認していると指摘しているが<sup>(92)</sup>、この指摘は三井楽というより長崎居住者に、そして両地の若年層に適応されうるといえよう（表6参照）。

カトリック信徒として信仰を子供に伝達するためにいかなる努力をした（し

	平均	39歳以下	40歳以上	50歳以上
三井楽				
男	5.82	2.00	6.03	6.48
女	5.39	3.00	5.87	7.96
長崎				
男	3.06	1.83	3.80	3.75
女	3.07	1.50	3.40	4.17

表6 帰結的断面の1指標としての子供数

ている)かという宗教的養育については、三井楽、長崎の間に大きな異なりはみられず、両者はともに宗教的社会化にいちじるしく強い責任感を有していることがうかがえる。両者は日曜のミサへの出席および朝晩の祈りを第1にあげている。けいこ(『公教要理』の学習)、黙想会(年の務め)への出席、親としての祈り、十戒の遵守などが次にくる。長崎において三井楽と異なる点は、子供をカトリック系の学校に通わせたということである。三井楽には教会経営の聖母保育園があるのみであるが、長崎には教会経営の幼稚園が多く、また、小中高校そして短大があるために、子供をかかえる教育機関に委託することにより宗教的訓育を計っている事例が4例みられる。さらに、長崎のみにみられる回答例は、信者同志の結婚を勧める、というのである。三井楽にこの記入がないのは、むしろそれを当然のこととしているからであろうか。

### むすびにかえて

われわれは農村部から都市社会へのカトリック信徒の移動が、かれらの宗教生活にいかなる変化をもたらすのであろうかということを、主としてスタークとグロックの提唱する宗教性の5つの断面のうち4断面を中心に観察してきた。以下、若干のコメントを加えながらまとめてとして記しておきたい。

われわれの被験者である三井楽出身の長崎移住者には、プロテスタント系教会であれ仏教系集団であれ、他の宗教集団に加入した者は皆無であり、幼少時

	イデオロギ-的断面	知的断面	儀礼的断面	合計得点
三井楽				
男	19.34 ①	9.10 ②	16.79 ②	45.23 ①
女	18.66 ②	8.24 ③	16.82 ①	43.64 ②
長 崎				
男	15.58 ④	9.13 ①	10.81 ④	35.52 ④
女	16.94 ③	6.87 ④	16.00 ③	39.81 ③

表7 各断面得点、合計得点および順位(○内数字)

から培われてきたカトリック信仰を何らかのかたちで継続していることが観察されている。すなわち、表7に明らかなごとく、イデオロギ-的、儀礼的断面における得点がいちじるしく高く、知的断面が低いという典型的な農村カトリックの様態を顕著に示している三井楽カトリック信徒が長崎に移動した場合にも、概ねその基本的パターンが大きく変化しているとはいえないからである。このことは、長崎市のなかでもいわばカトリック・ゾーンとでもいう市北部の浦上地区一帯にむしろ集中的にかれらが居住していること、つまり三井楽と必ずしも同一ではないがかなりの類似性をもつカトリック的環境<sup>(83)</sup>におかれていることと関連がありそうに思われる。したがって、かれらはとくに重大な文化的コンフリクトの体験を有しているわけではなく、適応の程度は高いと考えられる。

しかしながら、それぞれの断面とりわけイデオロギ-的断面および儀礼的断面に関して、長崎居住者は三井楽信徒と比較して、相対的に低い得点であることも指摘されなければならない。フィクター (Joseph Fichter) がニューオーリンズの都市カトリック研究において、ミサ出席・告解の頻度、教区立学校への子供の通学、教会の諸活動への参加、宗教的関心の度合いという4項を指標に、核的 (nuclear)、一般的 (modal or ordinary)、周辺の (marginal) そして休眠的 (dormant) の4つのカトリック信徒のタイプをあげている<sup>(84)</sup>。このフィクターによるタイプにしたがってわれわれの被験者を表現すれば、教区立学校が存在しない点を除くと、三井楽信徒のほとんどは核的信徒に近いが

たを示している。これに対して、長崎移住者には若干の核的信徒も存在はするが、一般的信徒のタイプが大多数を占めており、明確に2名の休眠信徒をすらみることができる。しかし、周辺の信徒は見出せない。このような各断面における得点の低下あるいは一般的信徒の増加、そして休眠の信徒の存在という事実は、いわゆる都市化の浸透による変化とみることができるであろう。すなわち、職業構成、学歴のごとき都市的価値、規準あるいは生活方法の取得にともない、旧来の農村的価値、生活方法とりわけ両親をはじめとする親族集団（とくに三井楽小教区では長期にわたる村内婚を通して一大血縁集団にも擬せられる社会構造をもっている）のネットワークなどによる社会統制、集团的拘束力の弱体化に由来すると考えられる。たとえば、三井楽においては日曜、平日を問わず、ミサが行なわれる場合に信徒は故人のための供養を神父に依頼する。かれらはこのことを「ミサを立てる」と表現する。多い人は月に1度ミサを立てるとい<sup>(85)</sup>。この際、依頼者のもとよりその当該親族は可能な限りのミサ出席が求められる。この事例のごとき祖先崇拝的慣行が親族構造を再強化しているすがたを三井楽ではみることができる。しかし、長崎移住者が長崎で「ミサを立てる」ことはまったくみられない。つまり、三井楽と比較的類似したカトリック的環境にあるとはいえ、移住信徒は親族構造と結合している永続的な人格的紐帯から解き放たれ、集团的なあり方から個別的なあり方が優位を占める社会関係の中におかれているということである。とりわけ、この傾向は家庭にある女性に比して、日常的に外教者（非カトリック）との接触を多くもつ男性に強くみることができるのである。

ところで、三井楽男性被験者39名のなかには12名の他住経験者がふくまれている。期間は2年から30年にもわたり、平均9.58年、長崎、福岡から関西、関東にまでおよんでいる。しかし、今日の三井楽におけるかれらの宗教生活は他住経験を有しない者に比べて格別きわだった異なりがあるわけではない。したがって、現在長崎に居住する者が三井楽に帰村するとすれば、三井楽の他住経験者と同じように、おそらく集团的規制と拘束力そして強力なカトリック的環境の作用により、かれらもまた高い宗教性を示すカトリック、フィクターのい

う一般的信徒から核的信徒となるであろうことが予測されるのである。

さらに、表7に示しているように、長崎の男性被験者は宗教性の他の断面でつねに第4位であるにもかかわらず、知的断面のみ僅かの差とはいえ第1位になっていることは注目にあたいする。都市社会により多い大学卒をふくむ学歴の向上あるいはカトリック書店の存在といった情報量の多さのごときが、信仰度、実践度の低下にもかかわらず、かれらの宗教的知識欲を増幅していることは否めない。ともかく、都市居住がかれらの知的断面における相対的な好成績と関係を有していることは事実である。

もちろん、われわれは性急な一般化ないし結論の導入には慎重でなければならない。しかしながら、上にのべてきた三井楽信徒と同地出身の長崎居住者の調査結果から、今後の研究を進めていく上での仮説として、信徒の都市移動・都市化は宗教性の諸断面のうち、イデオロギー的、儀礼的、そして当然のことながらその性格のゆえに帰結的断面をそれぞれひき下げ、他方、知的断面を押し上げる傾向をもつ、ということは許されるであろう。かかる仮説を検証するために、われわれは大阪府下に移住している三井楽出身信徒ならびに都市居住信徒の調査を、次のステップとして予定しているところである。

#### 註

- (1) John B. Holt, "Holiness Religion: Cultural Shock and Social Reorganization", *American Sociological Review*, 1940, 5, 740-747. cf. H. N. Nelsen and H. D. White, "Religion and Migrant in the City", *Social Forces*, 1972, 3, 379-384.
- (2) Renato Poblete and Thomas F. O'dea, "Anomie and the 'Quest for Community': The Formation of Sects among the Puerto Ricans of New York", *American Catholic Sociological Review*, 1961, 2, 18-36.
- (3) 坂井信生「メキシコのプロテスタント」, メキシコ調査委員会編『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究』, 1981, 130頁以下。
- (4) 三井楽カトリックの選択に際しては、長崎カトリック・センターの野下千年神父に多大のご援助を賜った。また、調査に協力を惜しまれなかった三井楽カトリック教会山内実神父および宿老の方々をはじめとする信徒の方々に厚く感謝の意を表したい。

- (5) 以下の三井楽に関する記述は『三井楽'82町勢要覧』『三井楽町町勢要覧資料篇』（いずれも三井楽町刊）、『五島要覧』（長崎県五島支庁刊）による。
- (6) ルイス・フロイス（松田毅一、川崎桃太訳）『日本史』9, 214頁以下。浦川和三郎『五島キリシタン史』5頁以下。
- (7) クラセ（大政官訳）『日本西教史』上, 283頁以下。なお、中島功（編）『五島編年史』にはアルメイダが耶蘇会修道士に送付した書簡が『長崎叢書』より要約のうえ記載されている（144頁以下）。フロイス『日本史』9にもアルメイダ書簡の記載をみることができる（225頁以下）。
- (8) 『五島編年史』の編者は「或ハ岐宿ト三井楽ノ境ニアル岐宿ノ小川原川ノ上流ナル和蘭山ト三井楽村岳郷ノ和蘭院畑ガ或ハコレナランカ推考」している（157頁）。
- (9) 『五島編年史』222頁。
- (10) 『五島編年史』198頁以下。
- (11) レオン・バジェス（吉田小五郎訳）『日本切支丹宗門史』上, 69頁, 177頁。
- (12) 『五島編年史』224頁。
- (13) 『五島編年史』242頁。
- (14) 五島における迫害殉教の数々については『五島キリシタン史』73頁以下参照。
- (15) 『五島編年史』286頁。
- (16) 『五島編年史』378頁。五島における絵踏みについては640頁にも記事がある。
- (17) 『五島キリシタン史』87頁。
- (18) 『五島編年史』723頁。
- (19) 大村領キリシタンの五島移住の原因として、浦川和三郎神父は「大村藩ではキリシタンの吟味が非常にきびしく、踏絵も毎年規制通りに励行した」こと、および同藩では「極端に産児制限を実行し、男子は長男だけを残して他は殺さしてしまう」ために「児を殺すことの赦すべからざる罪悪たると心得ている」キリシタンは他領へ逃亡せざるを得なかったことを古老の話としてあげている（『五島キリシタン史』89頁以下）。
- (20) 西村次郎（編）『魚目郷土誌』173頁。
- (21) 『五島編年史』672頁。
- (22) 『五島編年史』676頁。
- (23) 三井楽カトリック教会所蔵。
- (24) 長崎県立図書館所蔵。
- (25) 『カトリック三井楽教会創設100周年記念誌1880-1980』64頁以下。
- (26) 『三井楽修道院50年の歩み、小さき花の会からお告げのマリア会まで』12頁以下。
- (27) Rodney Stark and Charles Y. Glock, *Religion and Society in Tension*, 1965, 18ff.
- (28) たとえば、Thomas Hout, *Sociology of Religion*, 1958, 140f.

- (29) 概して、カトリック信徒の読書傾向は低いが、とりわけ長崎において低いことが指摘されている（P. F. オダナヒュー『日本のカトリック・カトリック生活の実態報告書1982-1983日本』13頁）。
- (30) 『公教要理』132頁、『カトリック要理』151頁。
- (31) 『日本のカトリック』8頁。
- (32) 『日本のカトリック』27頁。
- (33) 周知のごとく、長崎市はキリシタン時代からの伝統もあり、人口45万に対して約7.5%に当たる3万7千のカトリック信徒、17の教会を数え、我国で最もカトリック信徒の多い都市である。さらに、長崎浦上カトリック信徒の大部分は三井楽信徒と同じくキリシタン系カトリックである。
- (34) 「核的信徒」とは信徒として最小限要請される務めをこえた実践を行い、カトリック生活に積極的であり、少なくとも毎週ミサ、聖体拝領にあづかる理想的信徒である。「一般的信徒」は核的信徒と周辺的信徒の中間に位し、したがって、中位の仕方で自らの宗教生活を営んでいる。大体毎日曜日ミサに出席、小斎を守っている。フィクターの被験者カトリックの70%はこれに属するという。
- 「周辺的信徒」は自らもまた教会も教会員とみなしているが、過去1年間に一度もミサ、聖体拝領にもあづからず、告解もしていない信徒である。「休眠的信徒」はカトリック家族に生まれ、洗礼を受領してはいるが、教会の正規の会員ではない（Joseph Fichter, *Social Relations in Urban Parish*, 1954, 22ff.）。
- (35) あるインフォーマントは「ミサを立てるのは祖先供養です」と明言する。キリシタン系カトリック信徒における祖先崇拜的慣行については、さらに詳細な調査の必要があると思われる興味をひく点である。

## 〔付記〕

本稿は昭和59年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。